

牧師室から(2023.5.7)

『兵士ピスフル』で知られているマイケル・モーパーゴ氏を書いた本の中に『ヒナゲシの野原で』という本がある。出版社からの内容紹介は以下である。

「真っ赤なヒナゲシの花がゆれるフランダースの野。のどかな風景のこの場所は、第一次大戦時、激戦地になったところだ。今も、不発弾や持ち物が見つかる。近くに住むマルテンス一家には、代々伝わる宝物があった。それは詩が記された一枚の紙きれ。第一次大戦に従軍した兵士が書き、戦後、世界中で有名になった詩だ。なぜこの詩がマルテスの一家に伝わるようになったのかを語りながら、戦争と人々のかかわりを描く物語。あとかきでは「ヒナゲシの花」が戦後、戦没者追悼の象徴となった経緯が述べられている。」

その詩はこれである。

「フランダースの野に」

ジョン・マクレー

フランダースの野にヒナゲシの花がゆれる。  
何列も何列もならば十字架の間に  
空にはヒバリが  
勇敢にさえずっては飛ぶ  
砲声に声をかき消されながらも。

俺たちは死者。ほんの数日まで、  
生きて、夜明けを感じ、夕焼けを目にし、  
人を愛し、人に愛されていた。だが今、俺たちは横たわる  
このフランダースの野に。

俺たちの戦いをひきついでくれ。  
かつきた手から投げた、たいまつを  
どうか受け取り、かかげてくれ。  
死者との約束をやぶるなら  
俺たちは眠りにつけない。どんなヒナゲシが咲こうとも。  
このフランダースの野に。